【紹介】都議会議員による「読書会」の経験

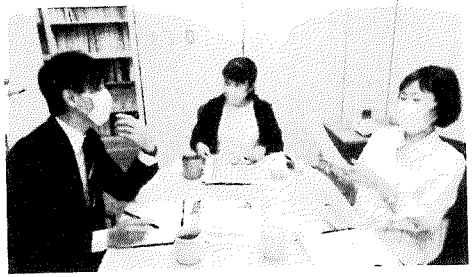
「私たちに学びと潤いを」

東京都議会議員の池川友一さん、藤田りょうこさん、米倉春奈さんの三人は、二〇二三年九月から『日本共産党の百年』や市田忠義著『日本共産党の規約と党建設教室』などをテキストに「読書会」をすすめ一年間で二二回となりました。二〇二四年一〇月に、その活動を振り返っての「座談会」をおこない、冊子にまとめました。冊子を読んでみて、編集部では、議員活動を発展させるヒントとともに、読んだ本への新鮮な感想、党員としての学習の意義、集団学習の威力など、学習活動のうえで大事な中身が語られていると思いました。そこで、三人の了解のもと「座談会」を再構成して紹介します。（編集部）

なぜ読書会をはじめたか？

米倉　都議団のなかで、〝党員としてなにかスカスカでしんどい、がんばるエネルギーが枯渇してきた〟みたいな話をしていて、自分が成長する機会をつくりたい、学ぶ場の保障が必要との問題意識が強まっていました。これまでも学ぶ場がない、どう学んでいいかわからないという声があったのに、後回しになってきた。もっと学んで、展望を持って、世界や日本でどういう変化が起きているとか、そういうのをつかみながらじゃないと元気に活動できないし、そういう場を増やしていくことが大切ではないかと思ってきたのです。それで二〇二三年八月に開かれた「若い世代・真ん中世代の地方議員の学習・交流会」で、議員は、議員である前に党員であって、党員としてどう元気に活動できるか、機関も議員団も考える必要があると話したんです。都議団でも努力してきたけれど、一九人の学習会では人数が多すぎたし、スケジュールが合わない。では、とりあえず条件があった三人ではじめてみようとなりました。

池川　自分も、学んでないわけじゃないんだけど、自分の中で深めて、意見交換もして、活動の力にもなり、党員としての成長にもつながっていく場がほしいと思っていました。そんなときに「学習・交流会」で、米倉さんが、〝宣言〟したので、見切り発車的な感じだったけど、ともかくやってみようと。つづけてきた一番の教訓は、「次の日程を必ず決める」。決めた日程の都合が悪くなった場合でも、曖昧にしないで次の日程を決めるのが大事だったと思っています。



読書会の様子（右から）米倉春奈、藤田りょうこ、池川友一の各都議会議員＝都議団控室

藤田　議員として、直面する問題を深めて、質疑はするけど、論戦ですぐに成果が出るわけではないですよね。前進しなければ、自分の力不足を感じたり、うまくいかなかった思いばかりが残っていました。だからこそ、土台が必要だなと感じてきました。市民の運動と力を合わせて、党がずっと積み重ねてきた蓄積を学ぶことが大事じゃないかと思ってきました。

党員としての覚悟ができた
――『日本共産党の百年』を学ぶ

こうして、最初は『日本共産党の百年』をテキストに、担当者が決められた範囲を報告し、それぞれが感想を出し合う形式で、八回かけて学びました。

池川　『日本共産党の百年』が発刊されて、その壁の前で、たじろいでいたときに、まずはやってみようと覚悟を決めてこの読書会をはじめました。そして、覚悟を決めて読んでよかったなっていうのが一番の感想です。この本が出た時に、ただの歴史の書物じゃなくて、現代の政治と結びつけていくことの重要性が強調されていたと思うんだけど、そういうことを強く感じました。一人ひとりの主権者が、歴史をつくっていく主体だということが一貫していて、その中で共産党がどういう役割を担ってきたのかがよくわかった。自分はどうこれから社会と向き合い、共産党員としてがんばるのか。そのことをすごく考えました。

米倉　『日本共産党の百年』は、集団で読めてよか

ったなと思っています。「政治対決の弁証法」の視点から百年をふり返っていて、世界と日本がどういう状況で、共産党がどう関わって社会を良くしてきたか、市民や他の政党とどう連携しながらきたのかが書かれていて、すごい歴史を持つ政党だなって思いました。

自分に引きつけて考えると、党員として、主体としての自分のスタンスが固まったなと思います。目の前には、いろいろ困難があるじゃないですか。でも、それは権力との関係の問題という面があって、その中で主体的に世の中を変えようとがんばってきた百年に、自分も参加しているという自覚がわいてきました。

議会論戦に向けて学ぶのと、科学的社会主義や党綱領を学んで、一歩深く社会をとらえる、歴史をとらえるっていうのは同じではないと思うんですよね。だから、学んではいるのに、スカスカになっている感じがあったんだなとふりかえっています。でも『百年』を学んで、ほんとうに自分のスカスカ感がなくなって、潤ったなっていう感じがあって、やっぱり学びの性質が違うんだなというのが実感です。

藤田　議員になる前に、看護師として働いていた時もやっぱり忙しくて、どうやって学んで、党員として深めていくかなんてとても考えられませんでした。私は二人が言うように蓄えみたいなものもなくて。だから、どうやって学べばいいのかとの思いはずっとありました。それが『日本共産党の百年』をいっしょに学ぶことで、初めてできたかなと思います。素直に言えば、初めて勉強する機会ができたみたいな感じです。

党員とは何かを改めて確認――『日本共産党の規約と党建設教室』を学ぶ

つづいて三人は、志位和夫著『新・綱領教室』（下）の未来社会論の部分を学び、市田忠義副委員長の『日本共産党の規約と党建設教室』へと進みました。週一回とまではいきませんでしたが、読書会を継続し、この本を六回かけて学び、討論しました。

藤田　たしかに、覚悟が決まったという感じがあります。ふり返ると、こうした文献はほとんど読めずにきたんです。読んでなじみやすかったのは、『日本共産党の規約と党建設』です。これで共産党員としての初心というか、党員とはどういうものかということを改めて学ぶことができたのはよかったなと思います。

これまでは議会の活動で深めたことが、暮らしとつながって生かされていく感覚が、あまりなかったんです。それが国民一人ひとりに問題意識があって、それをどう実現するかっていうことに寄り添ってたたかっていくのが党員であり、日本共産党なんだっていうのが、当たり前なんだけどスッと胸に落ちました。もっとみんなの中で活動したいと思える、党員と国民がつながっていることがよくわかる本だと感じました。

米倉　『日本共産党の規約と党建設教室』を読んだときは、読むことで学んだことも多いけれど、それにとどまらず、自分はどう党建設に関わるのかとか、どういう問題意識を持っているとか、現実の活動との接点をもった討論、交流も多かった。実践と結んだ議論になったことがよかったですよね。

会議でも交流になる場面もあるけど、時間が限られているじゃないですか。読書会だと三人で一時間半とか二時間とって学んで交流すると、持っている問題意識とかも出し合えて活動にも生かせるなと感じる場面がたくさんあったと思います。

池川　いま、自分たちが直面する問題との関係でも、根底にあるものを学ぶことで多角的に見られるし、深くとらえられるということがありますよね。「規約と党建設」というテーマもそうですが、学んで交流することで、一人で独習する以上に学べることがあると思います。

社会を科学的に見て、自己責任論を克服――『マルクスと友達になろう』を学ぶ

次に志位和夫著『Q&A　共産主義と自由』を学び、さらに科学的社会主義の全体像を学ぼうと不破哲三著『マルクスと友達になろう』に挑戦します。

私たちの読書会のすすめ方

①読書会のテキストとなる本を決める。次回はいつやるかを含め、日程をきちんと決めることが大事。
②読んでくる範囲と内容について紹介する人を決める。基本的には励まし合いながら、読んで参加することをめざす。読んでこられなくても参加できる。
③責任をもって読んでくる人がテキストの内容について、おもしろかったところ、交流したいところなど自由に報告する。レジュメなどはつくらない。
④報告をしたのち、感想を出し合う。深めて議論したいテーマがある場合は、別のテキストにあたることもある。

池川　どんなに矛盾があっても、その矛盾は必ずみんなの力で乗り越えて変えていくことができるという見方に立つのが、科学的社会主義じゃないですか。現実があまりにもしんどいだけに、今すぐ変わるかどうかという価値判断をしたくなる。即効性や即戦力を求め、目の前の成果が正義だとする社会に生きているからこそ、私は一定のスパンで変わってきたことをみんなで共有するとか、変えていける展望を学ぶ作業を丁寧にしていきたい。

自己責任論がすみずみまで入り込んでいることで、あらゆる問題が自分の努力の問題に置き換えられてしまう。社会の構造に問題があることが、自分や自分と家族の問題、友だちの関係の問題、自分の会社の問題に置き換えられて、社会の構造的な問題になかなか目が向かなくなっていると感じる場面も多い。

米倉　その人の特性の問題にされてしまうこともありますよね。そういう意味では科学的社会主義の力、強さが大事だと思います。日本社会を科学の目でとらえて、何を変えていく必要があるのか、何が原因なのかということを、事実に基づいてつかんでいくのが科学的社会主義と党綱領ですよね。私が共産党に入って良かったなと思うことの一つは、客観的にこの社会の問題と、何を変えていけば、一人ひとりが大事にされる社会になるのかを学べたことだと思っています。科学的なモノの見方と、変革の方向がつかめたことが、自分の人生にとっては大きかったと思います。

藤田　よりどころが何もない中で社会を生きていくのって、不安ですよね。何が根底にあるのかを学びながらだからこそ、活動や運動もできるけど、現象だけ見ていたらとてもしんどい。目の前には本当に悲惨な状況がたくさんあって、苦しくなることも多いけど、その中でも、どうしたらいいのかっていうことをちゃんと自分たちで考えて、変えていく展望を導き出せるというのはすごいことだなって思います。

学ぶこと、集団学習の意義

藤田　読書会で学んで、学ぶことは幸せだなということを実感できたかな。幸せだなと思ったのは、自分のこれまでの人生の中で、感想を求められたらいつも前向きなことを言わないといけないと思っていたことを、この読書会でみんなに話したら、それを受け止めてもらって、率直に話しあえたことがうれしかった。いつもがんばらないといけないと自分に言い聞かせている感じで。自分も自己責任論のなかにどっぷりつかって、ずっと自分を追いつめてきたんだと思います。

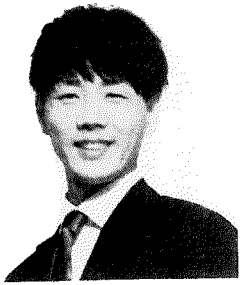
この読書会で学ぶなかで、うまくいかないことはみんなで相談しながら変えていけばいい、それが全部自分のマイナスの評価になると思わなくていいといった意見を聞いて、すごく生き方が楽になりました。すぐに結果を出さなきゃとプレッシャーに感じて、追い詰められているような生き方をしていたんだなと思うと、この一年間の読書会で救われた感じがあります。

池川　一回限りの学習会で感想交流をすることも大事だけど、テキストを変えながら、同じメンバーで、学び合うことで、学習が積み上がっている感じがします。時間をかけて問題意識が共有されていくところが大きいと思う。その意味で、読書会を続けていくことの大事さを感じています。また、議論・交流がすごく力になったと感じています。自分の言葉にして、感じたことや思ったこと、疑問に思ったことをアウトプットするのが大事だなと思っていて、この読書会がそういう場になっているのはとってもいいなと感じます。

いま都議団でも、三～四人の六つのグループに分かれての学習会が始まりました。私たちの経験を全体に紹介し、イメージを持つのに役立てたかと思います。

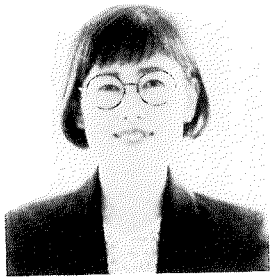
米倉　私たちの活動がきっかけの一つになって、都議団みんなではじまったのはうれしいですね。

私は学生時代に共産党に入って、学ぶ機会はたくさんあったけど、一年間、この読書会で学び続けたこと



池川友一都議：1985年生まれ、現在２期目

藤田りょうこ都議：1974年生まれ、現在２期目



米倉春奈都議：1988年生まれ、現在３期目

で、これまであんまりピンときていなかった点の理解が深まったというのが実感です。議員活動を経験してきた今だから深まる問題がある。いろんな相談を受け、実態に触れてきたからだと思います。いくつになっても、党歴がどれだけ長くても、学ぶ場が必要だと思いました。読んできた本は、登りがいのある山みたいな本ばかりで、ざっと読んで終わるのはもったいない。交流して深めることで、独習だけでは得られないものがあると思いました。

議席を増やして、都政・国政を変えよう

そして三人は、学び交流したことで得た活力を生かして、目前となった都議選・参院選で前進しようという強い意欲を語っています。

池川　私が入党したのは二〇〇三年ですが、それから一〇年以上、国政選挙では一回も共産党が伸びなかった。そういうきびしい状況が続く時でも、学ぶことが踏ん張れる力なんだと思うんだよね。私は、科学的社会主義とか党綱領を学ぶことで、社会も政治も必ず変わると思えることが、土台になっているなと。

すぐ変わらなくても、みんなで力を合わせれば、必ず分厚い壁でも突破していけると思える。そういう確信と展望をもって、都議選・参院選にのぞみたい。

米倉　私も学んで、交流して、得たものを話しあうことで、自分の言葉で語れるようになってきたという実感があります。この力をもっと生かして、議席を増やしたいと強く思います。議席が増えれば、議会に届けられる声をもっと増やせるよね。これまで政治の課題になっていなかったことも、政治の課題に引き上げられるというのも実感します。

藤田　社会は変わるというのは、都議団は実感しやすい場にいると思います。都政では、学校給食の無償化をはじめ、声を上げ続けてきたテーマが次々動いていますからね。共産党が都議選で三期連続で躍進して、国会規模に換算すると百議席に匹敵する一九議席を確保し、都民の声と力を合わせて変えてきたという確信があります。一つひとつの選挙で、共産党の議席を増やすためにがんばりたいと思います。

（いけがわ　ゆういち／ふじた　りょうこ／よねくら　はるな）